随想　子ども向けの本・君たちはどう生きるか、と哲学！

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

《君たちはどう生きるか》というアニメが宮崎駿によって作られ、話題を呼んでいた。著者が《君たちはどう生きるか》という本を読んだのは、小学五年生か六年生の時のことである。父親が買ってくれたこの本は、それまでに読んだことのない種類の書物であった。

突然であるが、著者は哲学とは何か?! を考えることが怖かった。《哲学》という言葉に触れたのは多分中学三年生頃だろうか。中学生の多感なころ、哲学を学んで、学んで、モノゴトを深く考えすぎ、結果自殺した大学生の話を聞かされた著者には《哲学》とは自らに何かしらを追求し、ついには自分を死に追い込んでしまうような恐ろしい学問である、というイメージで捉えてしまったのである。

それまで、小学一年生頃から本を読むことは好きであった著者は、親が買ってくれる本（毎月一冊の小説や伝記等を買ってくれるのが両親の教育の一環であった）以外に学級文庫と銘して教室に設置してある書棚にある本はすべて何度も読んでいたし、友だちから借りて読むことも多かったが、多くは種々の冒険物語と世界の偉人の伝記が占めていた。それらとは、何かが違ったのが、かの《君たちはどう生きるか》という書物であった。

随分大人になってこの本は、子どもにもわかる極めて初歩の《哲学書》であることがわかった。中学生になったわが娘にこの書物を買い与えたのは、くしくもわが親の意思を追いかけていたのであろう。考えてみれば、六〇年近い間に幾度も繰り返して世間で話題となるこの書物は、いかにも名著であった、と思える。

ちなみに、高校生の時社会科の先生が《何かの書物を読んで読後感想文を提出する》という宿題を出された。もう六三年も前のことになる。当時から、こういった種類の文章を書くことは同級生にとって不得手であったようで、五〇数人のクラスメートで、先生を満足させる内容の文は著者のものだけであったらしい（ラテン語らしい文字で最優秀マークがついていたのを、友人に冷やかされたのを覚えている）。その先生の出したこの宿題は、哲学入門を考えていたようで、次の宿題に《プラトンのイデア論》選んで随分苦労したことを覚えている。高校生に哲学を考えさせる試みをされたのは、その先生だけであった。もっとも、プラトンの哲学書を貸してくださったのは英語の先生であったから、その先生の大学生時代にとっては哲学という学問は結構なじみがあったのかも知れない。

近頃《あたらしい哲学入門　なぜ人間は八本足か?：土屋賢二著（**注1**）、文春文庫》という書物に出会った。四〇歳を超えてから哲学について改めて考える機会を得ていた著者には、それなりに《哲学史と哲学》についても読んでいたため、中学～高校生時代のように《哲学》を怖いものと受け止めなくなっていた。これも、先に述べた社会科の先生が施した教育の成果であっただろうか?!

この本の内容をざっと把握するために、目次の一部を見てみよう。《一時限目：講義の方針⇨哲学は難しい?⇨哲学は深遠でなければならない?⇨哲学は進歩しなくてはならない?》《二時限目：問題が無意味になるとき⇨なぜ人間は八本足か?⇨ロウソクの火は消えるとどこへ行くのか?⇨ウィトゲンシュタイン⇨アリストテレス》《三時限目：ことばが無意味になるとき⇨円周率を食べるｖｓ．石を食べる⇨ナンセンスな表現のいろいろ》《四時限目：強力な武器、基準：気温が二三度Ｃであることの基準⇨基準で作るナンセンス⇨ナンセンスな説明の色々⇨時間とは何か?⇨時間の不可解な点⇨基準による解決》～中略～《七時限目：よく使われるけど間違っている論法：単純化の論法⇨『意味がある』の客観的意味⇨『意味がある』の主観的意味⇨人生の意味をめぐる議論》…。こんな調子で一〇限目まで続く。

なるほど、哲学か…?!と、思われたことだろう。著者もそう感じた。先の《君たちはどう生きるか》は子ども向けの哲学入門であるのに、大人向けとはいえ《あたらしい哲学入門　なぜ人間は八本足か?》はいかにも哲学書…である。そこで《なぜ人間は八本足か?》の章を見てみよう。この本は次のように説く。

《なぜ人間は八本足か?》という問題は問題として成り立たない。なぜなら『なぜ』と問う時、その後には事実を述べた文が続かないとならないから…文章の規則に従っていない問いは規則に反しているから理解不能な意味のないものになってしまう。続いて、別の問題《ロウソクの火は消えるとどこへ行くのか?》はどうか（この問題は『不思議の国のアリス』に出てきたらしい）？先の問題と同じように意味がないと思うヒトがいるだろうが《なぜ人間は八本足か?》という問題のように即座に否定しきれない、何かしら深遠な問題のように感じたりする（だろう）。この書物の著者・土屋賢二氏はやはり間違った問題だと解説する。なぜなら、消えたロウソクの火は消滅しているのだから存在しない。その場所を聞いても答えられない、から…。

その理由は《消えた》という表現の持つ多様な意味合いにある、と土屋氏は説明している。マジシャンがハトを消す時、ハトが本当に消えたとは思っていない。子どもの姿が消えた、という時も同じである。このような平易な表現の時にはわかりやすくても、抽象的な表現でこのような誤解を生んでいる時には問題の理解が交錯する。それゆえに、哲学が難解だと誤解されているのだ、というのである。

氏の主張する《哲学は言葉に対しての誤解と格闘しているのだ》ということは、この書物が講義を文章として書きおろしている形であることでわかりやすくなっているものの、正直いって子ども向けの《君たちはどう生きるか》より、素直に何かを見つめ直し学ぼうとする姿勢よりも《持って回ってわかりにくく》しているように感じられる。

人類が言語をもって発達・発展してきたからこそ、言語を誤解なく理解することの重要性は十分に理解できるが、素直に考える方がわかりやすいのでは…と感じる。

注1：土屋賢二（つちや けんじ、一九四四年十一月二十六日～）は、日本の哲学者（ギリシア哲学、分析哲学）。エッセイスト。お茶の水女子大学名誉教授。岡山県玉野市出身。岡山県立岡山操山高等学校から、官僚を志し東京大学教養学部文科一類入学。一九六七年東京大学文学部哲学科卒業。その後宅地建物取引士の資格を取り、不動産会社で三か月働く。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学助手を経て、お茶の水女子大学教育学部、一九八九年に同教授に昇格。二〇一〇年に定年退職し、現在は名誉教授となる。

二〇二〇年、「無理難題が多すぎる」で本屋大賞発掘部門「超発掘本！」を受賞した（ウィキペディアより著者編集）。

※先月号の「**注2**」において、写真を掲載しておりませんでしたが「この写真」と記述しておりました。失礼いたしました。